講演「両班幻想―韓国近世史の現場を歩く」（要旨、日韓文化交流基金 NEWS87 号に掲載）

2018 年 7 月 12 日

吉田光男氏（東京大学名誉教授、放送大学名誉教授）

●両班（ヤンバン）とは何だろうか

韓国近世の社会や文化を考えるうえで最も重要な言葉として理解されているのが両班です。人気の高い韓国の歴史ドラマでも主人公の多くは両班あるいはその関係者たちです。しかし、現代の韓国でも日本でも、その意味がかならずしも正確に把握されておらず、韓国の歴史や伝統に対する誤解を生み出す原因ともなっているのは大変に残念なことです。

私は 1970 年代初めから、朝鮮時代（1392 ～ 1896）の歴史資料と現代に生きる両班たちの末裔に関する現地調査を融合して、韓国伝統社会における両班とは何者かということを考えてきました。そこでもっとも重要なキーワードは「学」と「士」という二つだということに気が付きました。「学」は儒教や中国古典に対する知識であり教養です。それを身に付け実践に活かすことのできる人が「士」です。「学」を家業とする一族を士族と言いました。

●本来の両班に関する三つの幻想

もともと両班とは、朝鮮時代に先立つ高麗時代（918 ～1392）に中国から入ってきた言葉で、本来は文武官僚を意味しています。文官が文班、武官が武班と呼ばれ、両者を合わせて両班というわけです。現代の言葉に直せば、国家官僚という意味になります。それが現在では、朝鮮時代からの名門という意味を持つようになっているのです。そこで少し過激な言い方をすれば、両班に関して三つの大きな幻想が生まれているようです。第一は、韓国伝統社会の最高身分は両班であるという幻想です。一般に、朝鮮時代の人々は両班、中人、常民、賤民（奴婢）という四つの身分に分かれており、その中で最高の位置にあるのが両班だというように理解されています。第二は、韓国伝統文化の体現者あるいは根幹を担う者は両班であるという幻想です。そして第三は、ほとんどの韓国人が両班の子孫であるという幻想です。これらの幻想は、歴史や文化を理解する上で少なくない誤解を生み出しています。

●両班は国家官僚のこと

第一の幻想について言えば、朝鮮時代に両班と呼ばれたのは文武の国家官僚でした。官僚になるためには、儒学や中国古典に関する高度な学識を持ち、国家試験である科挙に合格することが正統な道でした。科挙のうちとくに高級官僚の登竜門である文科大科の試験は、３年ごとに行われ、最終合格定員は 33 名でした。１年平均だと 11 名に過ぎません。朝鮮時代後期になると、定期試験の他に特別試験が頻繁に行われたので、年平均で 30 名ほどが合格することになりますが、それでも極めて狭き門であることに変わりはありません。

中国から入ってきた儒教テキストの四書（大学、中庸、孟子、論語）と中国古典の五経（詩経、易経、書経、春秋、礼記）を中心として、儒教（朱子学、性理学）の学識を身につけていることが合格の条件でした。両班というのは、世襲的な身分ではなく、「学」の修得という努力の結果手に入れた国家官僚という職であり地位でした。しかも、いったん両班になっても、退職したり罷免されたりすれば両班ではなくなってしまいます。

●士族から両班が生まれる

科挙に合格して両班になるためには、長い間の勉強が必要でした。これは誰でもできたわけではありません。それだけの条件を備えていたのは、地主として経済的・社会的な支配層を形作っていた士族（士大夫、読書人とも言われました）です。言わば知識人たちです。この士族から両班が生まれました。士族は朝鮮時代のエリートであり、農村では最上位の階層として支配権をふるっていましたが、朝鮮時代の末期になると、その士族と両班の混同が起きます。18 世紀末の学者朴趾源が、小説『両班伝』の冒頭で「両班とは士族の尊称なり」と言っているように、朝鮮時代後期には、両班は士族を尊敬した呼称になっていました。官僚でなくとも、士族家系に属していれば両班と呼ばれるようになっていきました。ここに現在の韓国人総両班末裔状態の出発点の一つがみられます。偽物であれ両班（実は士族）の一員となった人たちは、儒教文化を我が物だと思うようになり、韓国伝統文化の根幹だと認識するようになったというのが実状なのです。両班と士族は分けて考える必要があります。

●両班・士族と韓国伝統文化

第二の幻想について言えば、たしかに韓国伝統社会の高級文化という意味では、士族や両班たちが支えていたことは否定できません。しかし、一口で伝統文化と言ってもその内容は多様です。人口の大部分を占める庶民たちは、儒教とは異なる土俗的な世界に生きており、自分たちの文化を作っていました。人口数を基準にして見ると、土俗的な文化こそ主流で、儒教文化は傍流ということになります。だが、両者は排除し合うものではなく、入り交じっていました。それが韓国伝統文化ということになります。儒教も韓国伝統文化の一部だと言えばよろしいでしょう。

●韓国人総両班末裔現象

第三の幻想で言えば、現在、多くの韓国人が両班の子孫だという意識を持っていることです。韓国では５年ごとに国勢調査が行われており、その中で 1985 年、2000 年、2015 年には特別に姓氏と本貫（一族の始祖発祥の地）の調査が行われました。姓と本貫が同じ人々の集団を氏族あるいは宗族と言いますが、これが韓国人にとって最も基礎的な血縁関係ですから、国勢調査でも調査されたわけです。その結果、調査対象者のほぼ全員が姓と本貫をもっており、どこかの氏族に属することがわかりました。どの氏族でも、先祖には必ず

両班がいます。すると、韓国の人々の大部分は両班の末裔だということになります。しかし、実態を見ると、大部分は明らかに農民や手工業者などの庶民です。彼らは 100 年あるいはそれ以上の時間をかけて身分上昇を果たし、朝鮮時代末期になると次第に士族の一族に潜り込んでいきました。その結果、ほとんどの韓国人が両班（実は士族）の一族だという意識を持つようになるのです。

朝鮮時代に３年ごとに全国一斉に住民調査が行われました。その登録簿である戸籍台帳を追いかけてみると、時代が下がるにつれて常民と奴婢（つまり庶民）の数が著しく減少し、士族層の人口が激増していきます。地域によっては人口の過半数が士族層の人々だという数字が出てきます。虚偽の戸籍申告や様々な不正により、常民や奴婢が両班士族の仲間顔をするようになります。それが何代か続いた結果、現在見られるような韓国人総両班末裔現象が起きたのです。これは朝鮮時代から大きな問題になっていましたが、なし崩し的に事態は進行していきました。それが後世の人々の間に両班・士族について誤解を生む原因となったのです。変化が起き始めたころ、学識を持っていなかった人々は、戸籍などで身分上昇しても、ただちに士族になれたわけではありませんが、時間の経過とともに事が進み、庶民がいつの間にか士族たちの系譜である「族譜」の中に入り込んでいきます。こうして庶民が士族家系の一員だということになりました。ここに両班と士族の混同が加わり、韓国人がすべて両班の末裔であると意識する現象が起きるようになります。

●「学」こそ両班士族の根幹

韓国伝統社会は、正統な思想・学問とされた儒教と中国古典の「学」を身につけた士族が社会の最上層を形成していました。士族中で科挙に合格して「学」の力を認められた人々が官僚として国王を補佐し、政治行政を預かりました。これが本来の意味での両班でした。このような両班の実態と呼称範囲の変化について、時間軸の中で明確に認識することが韓国近世の歴史や伝統社会の理解には重要なのです。

プロフィール　吉田 光男（よしだ　みつお）
1946 年生まれ。東京大学文学部卒業、同大学院人文学研究科博士課程修了。博士（文学）。東京外国語大学朝鮮語科、東京大学文学部・大学院人文社会系研究科の助教授、教授を歴任し、放送大学教授・理事・副学長・図書館長。
現在は東京大学名誉教授・放送大学名誉教授。 韓国近世史研究を専門とし、1970 年代から韓国にわたって文献資料と現地調査を続けてきた。近世都市と農村における集落構造、住民の社会関係、血縁と地縁、身分構造、ソウルの都市史的研究、商業と流通、交通、政治、東アジア国際交流など研究テーマは多岐にわたり、足繁く韓国に通う現代韓国社会ウォッチャーでもある。
主な著書に、『近世ソウル都市社会研究』（2009 年、草風館）、『漢京識略』（訳註、2018 年、平凡社）、『朝鮮史研究入門』（共著、2011 年、名古屋大学出版会）、『日韓中の交流』（編著、

2004 年、山川出版社）など、主な訳書に、朴漢済『中国歴史地図』（2009 年、平凡社）、韓国教員大学歴史教育科『韓国歴史地図』（監訳、2006 年、平凡社）、韓永愚『韓国社会の歴史』（2003 年、明石書店）、金東哲『朝鮮近世の御用商人』（2001 年、法政大学出版局）など。